

夫と6年間レスだった私が悪役令嬢に転生したら、
絶倫美形騎士が溺愛してくる

——それは王宮で開かれた仮面舞踏会から始まった。

「ええ。わたくし、その方に好かれておりませんの。何度振られたか、わかりませんわ」
「へえ……？ ずいぶん馬鹿な男もいるんだな。なんて名前の奴だ？」

（あ、貴方^{あなた}のことよ……!!）

月夜の庭園。

ベンチで見つめ合う二人の男女。

周りは薄明かりで、仮面を着けた彼が誰かは特定できなかった。
ただ、ミレールにはわかっていた。

その男性がミレールと険悪な仲である、ノア・オルノスだということを……



ミレールは三人兄妹の末っ子で、エボルガー侯爵家の長女だ。

艶やかな栗色の髪は緩くウェーブし、二重瞼の吊り上がった目の中では紫色の瞳が印象的に輝いている。悪役だがスタイル抜群で背も高く、人目を引く美しい容姿だった。

ミレール・エボルガー。歳は二十。それが現在の自分だ。

そう、ミレールには他の貴族子女と少し違うところがある。

それは今いるこの世界とは違う世界の記憶がある、ということ。

この世界は、大人向けweb小説『愛と欲望に溺れて』という物語の中。

ミレールは作品の中に複数登場する悪役令嬢の一人だった。

主人公を襲わせようと男を雇ったが失敗し、逆上した男に凌辱され精神崩壊する……という悲惨な末路を迎えるキャラクターだった。

前の人生での名前は佐々木杏。ごく普通の主婦だった。

年齢は三十代半ばくらいだったと記憶していたが、ミレールの体に入ってからはその辺りの記憶は曖昧になっている。

パート先から帰る途中、疲労と寝不足で意識が散漫になり、信号を無視した車に気づくのが遅れてそのままねられてしまった。

そして気づくと、ミレールに転生していたのだ。

この時ミレールは大病を患っていたらしく生死の境を彷徨っていたが、なぜかミレールとして目覚めたのは杏だった。

杏だった頃は夫も子供もいた。夫とは年々会話が少なくなり、子供を産む前からセックスレスに

なっていたし、夫婦仲も冷え切っていた。さらには長年のワンオペ育児に加え、家計を少しでも支えるために仕事を始めたせいで、杏の体力は限界を迎えてしまった。

だからこそ目の前に迫った車のヘッドライトを見るまで、自分の危機に気づくことができなかった。

ミレールとして目覚めたあと、この事実を知った杏はひどく取り乱した。

元いた世界に戻れない苦しみと、自分の家族を名乗る見ず知らずの人たちへの恐怖。

現実を受け止められないミレールの悲しみと混乱は数週間続いたが、ある日悟った。

（私はここで、ミレールとして生きなければならぬ……。いつまでも過去を引きずって泣いてるだけではダメなのね……）

それからの杏はできる限りミレールとして振る舞うべく、そして、ミレールを真つ当な人間として認識してもらえるように努力を重ねた。

杏としての過去は捨て切れないが、ここでミレールとして生きていくことを徐々に受け入れたのだ。

それから数ヶ月かけ、杏はミレールになっていったのだった。

この物語の主人公レイリン・サバランは、三人の男性と恋愛を繰り広げる。

レイリンはさっぱりした性格だったが、目立たない伯爵家の生まれで大人になるまで体が弱かったこともあり、深窓の令嬢として登場した。

腰までのまつすぐな銀髪に、小動物を思わせるくりつとした大きな桃色の目。

胸は大きいが身体は華奢で、背はミレールより低かった。

誰からも愛される美しく可憐な容姿。それはWeb小説と変わらなかった。

そして物語は仮面舞踏会から始まる。

大人向けの小説だったからか、レイリンが特定の男性を選ぶまで三人との駆け引きや際どいシーンが盛り沢山で、それが杏には堪らなく興奮するポイントだった。

ミレールとして目覚めたあと、すぐにレイリンにこれまでのことを謝罪し、どうにか友人関係を修復させたが、ただ一つ修復できないことがあった。

それが、幼馴染であるノアとの関係だ。

小説のミレールはヒーローである王太子のマクレインに好意を寄せていたが、杏が好きで特に推していたのはマクレインの護衛騎士として登場していた脇役のノアだった。

しかしミレールとノアは昔から犬猿の仲。

元々の原因は父親同士の仲が非常に悪いことから始まるが、ミレールは明確な理由を知らない。

しかしそれと反比例して母親同士の仲は非常に良かったので、ノアはエボルガー侯爵家にたびたび遊びに来ていた。

そして、ここからノアとミレールの腐れ縁が始まる。

幼馴染といっても、ノアはミレールを非常に嫌っていた。

なぜなら幼い頃からミレールがノアに嫌がらせをしかけ、やつてもいないことをでっち上げたり、

マクレインを執拗に追いかけて回したりしたからだ。

そんなミレールとノアの仲は相当険悪だった。

ノアは、傲慢で高飛車なミレールではなく、心優しい人柄のレイリンに惹かれていく。どこをどう変えても、今さら仲直りなどできるはずのない相手だったのだ。

転生当初はどうにかしてノアとの関係をやり直そうとしたが、この時点ですでに修正できないくらい嫌われていた。

以前たまたま王宮を訪れた際、謝罪しようとマクレインに近づこうとしたら、ノアは厳しい口調と冷やかな視線で「殿下に近づくな！」や「帰れっ！」などと言って辛辣に追い払った。

ノアは騎士家系でオルノス侯爵家の嫡男。歳はミレールと同じく二十だ。

彫り深い端正な顔立ちには、深みのある青が印象的な瑠璃色の瞳。さらに銀河を映すような艶やかな黒髪。鍛えられた体はしなやかでとても引き締まっていた。

そして代々続く侯爵家という家柄もあり、ノアもマクレイン同様、女性たちからとても人気がある。

現実になったノアは想像以上に素敵で、ミレールに転生したばかりの杏は一目で心を奪われてしまった。

しかしそんなノアとの関係は修復不可能なほど最悪なもので、心の折れるようなやり取りを数回したところで、ついに諦めてしまった。

（ここまで激しく嫌われているのなら、ノアには近づかないほうが身のためね。わたくしは傍観者

になるつもりですから、主要人物たちとは極力距離をとるようにしなくては……」

そうしてミレールはノアとの関係修復を諦め、せめて小説通りのミレールにならないように、静かに身を引いたあとでレイリンを応援しようと思ったのだ。

小説の中のミレールは、この仮面舞踏会でもレイリンとマクレインの邪魔をしていた。

それを回避するため、初めは仮病を使い欠席しようと思っていたが、どうしても物語の始まりを見たかったミレールは名案を思いついた。

——変装して仮面舞踏会に行こう、と。

「ねえ、アルマ。たしかこの前、顔を変えられる不思議な薬があると行ってなかったかしら？」

ここはエボルガー侯爵家のミレールの私室。走り回れそうなほど広々とした間取りに、赤やピンクの華やかな高級家具が所々に配置されている。

アルマはミレール専属の侍女だ。腰までの赤毛を後ろで一つにまとめ、笑うとエクボができるのが彼女の特徴だった。身長はミレールより少し低い、歳は二十五とミレールよりも年上で、細かいことを気にしないおっとりとした感じの女性だ。

「はい、ミレールお嬢様。噂によるとあるそうですよ」

「それはどこにあるの？」

「確実な情報ではありませんが……平民街の裏路地にあるお店だとか——」

説明を受けたミレールはアルマに頼み、ついに薬を手に入れたのだった。



そうして迎えた王宮での仮面舞踏会当日。

仮面舞踏会は、仮面姿で訪れた貴族は誰でも参加することができる。幼い頃から頻繁に舞踏会やお茶会が開かれているため、顔見知りの貴族は仮面を着けていても大抵判別できる。

だがミレールは、薬のおかげでまったく違う顔になっていた。

この仮面舞踏会では、フィナーレでは全員が仮面を取ると決まっている。だから顔や髪色を変えていかないと正体がバレてしまうのだ。

栗色の髪は金髪に変わり、キツい印象を与える吊り上がった紫色の瞳もタレ目がちな緑色の瞳に変わっている。そのおかげかミレールだと気づかれることなく会場に入ることができた。

『いいですか、ミレールお嬢様！ この薬は数時間しか効かないそうです。今飲めばおそらく日付が変わるくらいには変身が解けてしまいます！』

アルマが口調を荒くして話していたことを思い出し、ミレールは拳をぎゅっと握る。

（まるでシンデレラみたいね。……問題なんて何もありませんわ。わたくしの目的はただ一つ。最悪な終わり方を回避して登場人物たちを見守ること！）

こうしてミレールは仮面舞踏会の会場へ入っていった。

会場は熱気であふれていた。

王国中のほとんどの貴族子女が参加しているのか、すでに多くの貴族たちで賑わっていた。変装したミレールは壁の花となり、ワインを手にレイリンの様子を眺めている。

いつものミレールなら攻撃的な真っ赤なドレスで、我先にとマクレインを探しているのだろうが、今のミレールにその情熱は微塵も残っていない。

転生した時点でマクレインへの想いは綺麗サッパリなくなってしまった。

（やはり仮面を着けていても、レイリンは目立ちますわね。まずあの美しい銀髪ですぐにわかりますもの）

目を引く容姿は会場でも一際目立ち、早速レイリンとマクレインが接近していた。

マクレインは太陽のような金色の髪に、ルビーのような真っ赤な瞳。甘いマスクで柔らかに微笑むと、すべての女性を虜にする。

さらには長身で、主人公の相手役として相応しい容姿を兼ね備えていた。

小説のミレールが恋い焦がれ、誰よりも憧れていた人だった。

そして左斜め奥にも、目立つ人物がいた。

（あつ、あそこにいるのはたしか、ジョセフ・ディーラー……）

マクレイン、ノアと並ぶもう一人の男性がジョセフだ。

燃えるような赤毛に、橙色の垂れ目の傍に、小さなホクロがあるのがジョセフの特徴。

ノアやマクレインと同様に美男子だ。

その中でもジョセフは色気があふれており人当たりがよく、三人の男性の中で一番女性にモテていた。

公爵家の嫡男で性に奔放な遊び人としても知られているが、彼はレイリンには選ばれなかった。

だがジョセフは悔しがることなく笑顔で身を引いた、とミレールは思い出した。これだけモテる男なら他の女性でも問題ないのだろう。

会場ではレイリンがノアとダンスを踊っていた。

普段のノアは王太子であるマクレインの護衛騎士だが、この仮面舞踏会ではオルノス侯爵家の嫡男として参加している。

（やはり、全然違いますわ……）

レイリンと踊るノアは普段自分に見せる冷ややかな態度とは違い、仮面越しでもわかる笑顔で楽しそうだった。

その様子を見てミレールは胸がズキズキと痛むのを感じた。

（嫌われているのはわかってはいるけれど、あからさまに態度に出されるのは辛いですわ）

壁にもたれてワイングラスに口を付けながら、ミレールの気持ちはどんどん沈んでいく。

ノアと結ばれる未来を夢見ているわけではない。ただ最悪の結末を回避できればそれでいい。

……そう思うのだが、それでもノアへの気持ちは止められなかった。

目の前ではレイリンがノアと踊り終え、さらにジョセフとのダンスが始まっている。

小説では一通り三人と踊ったあと庭園に出たレイリンは、たまたま外にいたマクレインと鉢合わ

せ、庭園の奥で口づけを交わしていた。

(この時、レイリンの後を追ってきたノアがその現場を目撃して、ショックを受けて退散するといふ流れだったはずですが……)

何度も読んだ小説なのでよく覚えている。ジョセフはダンスを踊ったあと、帰り際にレイリンに声をかけていた。

(まあ、出だしなんてこんなものですね。レイリンと王太子殿下の様子を出歯亀^{でばがめ}するのは気が引けますわ)

だがもやもやした気持ちが収まらず、ミレールは近くのテーブルにあった様々な料理を皿いっばいに盛り付け、ワインの瓶二本を抱えると、一人外の庭園へ出た。

会場の熱気に当てられていたせいとか、外の澄んだ涼しい風がとても心地よく感じる。

王宮だけあって広大な庭園は美しく整備され、中央には塔のような立派な噴水があり、見る者の目を楽しませてくれる。

そんな素晴らしい庭園の片隅で、ミレールは持ってきた料理とワインをベンチに置き、一人でやけ酒をしていた。

仮面を着けていてもわかるノアの楽しそうな様子。

それとは反対に、ミレールに冷たく当たるいつもの蔑^{あざむ}むような態度。

あまりに対照的すぎて、思い出すと胸がズキズキ痛んで悲しくなってくる。

(わたくしがどう足掻^{あが}いても、ノアにはとても嫌われていますもの。優しくしてほしいなんて贅沢^{ぜいたく}は言いませんが、せめてあの冷たい瞳で見るのはやめてもらいたいですわ……)

ノアがミレールを見るときは煩^{わづ}わしそうな冷ややかな瞳。

それを見ると、元の世界での夫を思い出すのだ。

杏だった頃に、そんな瞳を幾度も目にしていた。それを思い出すと、胸の奥がキリキリと痛む。

その思いを打ち消すように、ミレールはグイッとワインを瓶ごと呷^{あお}った。

とても貴族の令嬢とは思えない呑み方を続けた彼女は、ベンチに置いた料理を口にしつつすでに酔いが回り、夜空に浮かぶ月が二重に見え始めていた。

「はああ……」

アルコールを含んだ深いため息をついていると、突然物陰から何者かが現れた。

「——ひっ！」

「ん？ ……あんたは？」

(えっ!?)

バツと物陰から姿を現したのはノアだった。走ってきたのか少し息を切らしている。

「晩酌中すまない！ 銀色の髪的女性がこの辺りを通らなかったか？」

パツとミレールの様子を見て、ノアは急いだ様子で問いかけてきた。

ミレールはまだ心臓がドキドキと脈打っている。まさかこのタイミングでノアが現れるとは思わなかったからだ。

（お、落ち着くのよ！　そう、ノアはレイリンを追って庭園まで来るのでしたわ）
酔っていたが、そのくらいは思い出せた。

だが思い出した途端、気持ちもまた降下していく。

パッとノアから視線を逸らしたミレールは、沈んだ表情を隠しながら、ボソボソと呟いた。

「……その女性でしたら、どなたかとあちらへ歩いて行きましたわ」

ノアの態度がいつもより柔和で口調に棘がないと思って、そういえば自分は別人になっていたのだと思ひ出す。

レイリンとマクレインが消えた方向を指さすと、ノアもその方向に視線をやった。

「恩に着るっ」

そう残し、そのまま彼は脇目も振らず走って行ってしまった。

「はああっ……」

その後ろ姿をベンチで眺めるミレールの口からは、さらに深いため息が漏れ、彼女はワインを手をベンチの背もたれに体を預けた。

見上げた星空も月も、二重どころか視界の全てが歪んでいた。

そして、ミレールの目から涙があふれては次々と頬を伝って流れていく。

今更だが、来なければよかったと後悔していた。

まさかこんな場所でノアと遭遇するとは思わなかったし、普段の自分との対応の違いを見せつけられ、ミレールの気分はどん底まで落ち込んでしまった。

ドレスの袖口で涙を拭い、隣に置いてあったワインの瓶を手に取り、また勢いよくグイッと呷る。

……もう男に振り回されるなんて懲り懲りだ、と言わんばかりに。

「よしっ、今夜はとことん呑みますわっ！」

この時、ミレールは完全に酒に吞まれていた。

その後しばらく一人で晩酌していたミレールだったが、彼女のもとに足音が近づいたかと思うと、再び誰かが通りかかった。

「――あれ？　あんた、まだいたのか？」

「んー……？」

そこには暗い表情のノアがいた。

相変わらずの美男子ぶりだが、明らかに意気消沈しており、話している声のトーンも先ほどより低かった。

すでに出来上がっていたミレールはワインの瓶を手を、据わった目でノアを見る。

「あら、あらたこそ……ヒック、その様子じゃあ、振られたようれふわねえ……」

ろくに呂律も回らず、しまいにはカラカラと笑い出す始末。

離れた場所でもその様子を見たノアは、途端に呆れた顔に変わった。

「おい……、呑みすぎだ」

「ほっといてくらさいっ！　ヒクッ、あらたには、関係、ありまへんわっ」

「あのなあ……」

酔いの回った怪しい口調で反抗するミレールは、またグイッとワインの瓶に口を付ける。
そんなミレールを、ノアは腰に手を当て呆れた様子で見ていた。

「男なんて……、男なんてえ、クソくらえれすわあつ！ 自分勝手に我がままで、人の気も知らないえー!!」

「――なんだ。あんたも振られたクチか……」

酩酊^{めいて}して思ったことを叫んだミレールに、ノアが同情したように話しかけてくる。

「フンッ！ うっさいれすわっ……!」

「ははっ!」

ぷいっと横を向いたミレールを見て、突然ノアが笑い出す。

そしてベンチで座っていたミレールの隣に近づいたかと思うと、すぐ側にドカッと座った。

「な、なんれすの……?」

「俺にもくれ」

「え……?」

「それ。あんたが持つてるやつ」

ミレールは不思議そうに首を傾げて指さされた瓶を持ち上げる。

すると、ノアはその瓶を奪うように掴み、ごくごくと水でも飲むように一気に呑み干してしまった。

「あ、あ……! わたくしの、ワイン……」

その様子をミレールは信じられない思いで見ている。

ノアが自分の隣に座り、自分に話しかけている。

それだけで胸がドキドキした。まるで学生時代に戻ったような気分だった。

「ん? なんだよ。ケチケチするなつて。俺もむしゃくしゃしてんだ」

「れも……」

ミレールが呑んでいたワインに口を付けて呑んだ。いわゆる間接キスだ。

ノアは、普段のミレールとは話すのも嫌そうだった。だから彼がこんなことをするなんて信じられなかった。

「あんたはもう呑まないほうがいい。……だいぶ、酔っ払ってるみたいだしな」

持っていた空の瓶をベンチの脇に置いたノアは、隣に座っているミレールを見下ろす。

ミレールはふん、と再びそっぽを向いた。

「ッ! ほつといて、くらしい……!」

「ほら、会場まで送ってやる。行くぞ」

「……いやれふ」

「はっ?」

「れすからつ、ほつといて、くらしい! まだ呑むんれす! あらただけ勝手に戻ればどうれすか!」

いつも冷たくあしらわれるのに、自分がミレールだとわからないからかノアの態度がまったく

違う。

それがとても悲しくて、ミレールの目からポロポロと涙があふれてくる。

「お、おい……」

「ひっく、っ……ふっ、う……」

「泣くなよ」

ミレールは彼に、早くどこかへ行つてほしかった。

ノアは騎士だから、知らない女性に紳士的に接しているだけ。

そう思うのだが、長年放置され続けて夫に優しくされなかった杏は、少しの優しさだけでも泣きなくなるほど嬉しかった。それが好意のある男性なら尚更だ。

「……ほら」

しばらく泣いていたミレールに、ノアがまた話しかけてきた。ちらりと顔を向けると、ノアがミレールにハンカチを差し出している。

「うっ、ふうっ……ううっ！」

ノアの見せる優しさに、今度こそミレールの涙腺が本格的に決壊した。

「おいおい……大丈夫か？」

「うっ、く……ありがと、ごさいばず」

狼狽^{うろた}えるノアから受け取ったハンカチで涙と鼻水を拭く。

ぐしゃぐしゃになったハンカチを見て、ミレールは落ち着きを取り戻した。

「申し訳、ありま、せんわ……」

「いや」

「もう二度と、お会いすることは、ありませんが……いつか、必ず、お返ししますわ」

思い切り泣いたせいとか、だいぶ気持ち晴れてきた。

まだ頭はふわふわしていて酔いはまったく醒^さめていないが、少しだけ冷静になっていた。

「もう会わないって、ずいぶんはつきり断言するんだな？」

「本当れす、もの。ハア……れすが、あらたが、どなたかくらいはわかります」

「へえ……？ 俺のこと知ってるのか？」

「ええ、まあ。黒髪は珍しい、れすから……」

「ま、そうだな」

意外にもあっさりノアは自らの正体を認めた。

最終的に仮面を外すのだから、ここでバラさなくてもいずれわかること。おそらくそう思ったのだらう。

「あんたは？ こころじゃ、見かけない感じだが……」

自分のことを尋ねられ、ギクリとする。

「仮面舞踏会で身元を尋ねるなど、マナー違反れすわ」

「そうか。それは無粋^{ぶすい}なことをしたな。ただ、あんたの声……、俺が知ってる奴に良く似てるんだよなあ」

鋭いノアにミレールはさらに驚いたが、酔いもあり意外と冷静に振る舞えた。

「あら、イヤれすわ……。そのような口説き落としては、通用いたしません」

「あ？ いや、そういう訳じゃないんだが……」

「仕方ありませんわね。……わたくしのことはビアンカとでもお呼びください」

「ビアンカ？」

「ええ。偽名れすわ」

「ははっ！ やっぱあんたって面白いなっ。ハッキリ言いすぎだ！」

「それは、もちろん。仮面舞踏会れすから……」

何を隠そうこの小説の仮面舞踏会は、意気投合した相手と睦み合う場でもあるのだ。

小説でも、庭園でそのようなことが行われている……ということが曖昧に書かれていた。既婚者や婚約者がいる者もあり、この時ばかりは現実から逃れて、羽目を外す輩が多い。

そんな庭園で月明かりの下、ノアとミレールは見つめ合いながら距離を詰めていく。

「ではビアンカ。俺と一曲踊ってくれないか？」

「っ……」

「俺とは嫌か？」

「い、いえ。ただ……」

ミレールは迫るノアを見つめながら狼狽える。

まさかこんな展開になるとは思わなかった。

ノアはもうそれほどレイリンに思い入れがないのだろうか。

ミレールと酒を呑む前は、振られたと漏らしていたのに。

振られた直後だから、誰でもいいのだろうか、とも考えるが、ノアはそこまで恋愛に対し奔放な性格ではない。

一人の相手を一途に想い、何かあれば己の命を懸けるような人なのだ。

（嬉しいけれどノアはミレールだと気づいていませんし……、自分なのに自分ではないから、好かれても手放しでは喜べませんわ）

偽装したミレールの姿がノアの好みにあてはまったのだろう。

だとしてもやはり、今のミレールは本来の自分とは程遠い容姿をしている。決してミレールのような人を好きな訳ではないのだ。

複雑な思いを抱えつつも、ミレールはノアと向き合った。

「わたくしもお聞きしてよろしいかしら。あらたのお名前は？ わたくしの知っている方だと思うのれすが……」

話題を変えるべく、ミレールは微笑みながら単刀直入に聞いた。

「俺はノア。名前くらいは、聞いたことあるだろ？」

「……ふふっ、あらたこそハッキリと言いますぞ」

まさかノアが本名を出すとは思わなくて驚くが、ミレールは視線を逸らし笑い返す。

庭園のベンチに座り月を見上げながら話す彼女を、ノアは興味深そうに笑いながら眺めていた。

「隠す意味がないしな。ノアという名の貴族は、おそらく俺しかいないと思うが……」

ノアもミレールがはぐらかすのをわかっているのか、ミレールのすぐ側まで距離を詰めると、誤魔化すことを咎めるように強く手を握った。

「ではやはり、わたくしの知っている方だと思いまふわ」

ミレールの心臓は忙しく動いているが、彼女は平然を装いまたにこりと笑った。

「知っているなら……あんたは、どうする？」

「——っ」

ノアはミレールの手の甲に唇を落とす。

（動揺してはダメ。ノアはわたくしだと知らないのだからバレル心配はありませんし、適当にあしらえばやり過ごせますわ）

ドキドキしながらミレールは手をパッと離れた。

「わたくしの知っている方でしたら、このまま退散させていただきますわ。わたくしのような者が関わっていい相手ではございませんので」

「もう一度言う。ビアンカ、俺と踊ってくれないか？」

「ご、ご冗談を！」

「これも何かの縁だ。あんたも振られたクチだろう？」

ミレールの手を再び握り、ノアは手の甲に再びキスを落とす。ミレールは逸る心臓を必死に抑えた。

「それは……わたくしに、魅力がないからですの。その方には他に想う方がいらつしやるので……」

「想い人？」

「ええ。わたくし、その方に好かれておりませんの。何度振られたか、わかりませんわ」

目の前にいる男から顔を逸らし、手を振り払おうとするが、しっかりと握られた彼の手が離れることはなかった。

「へえ……？ ずいぶん馬鹿な男もいるんだな。なんて名前の奴だ？」

（あ、貴方あなたのことよ！）

これ以上ノアと会話をしているといつかボロが出してしまう。そうなる前にかくここを出て、ノアから離れなくては。

それに姿が変わってからすでに長い時間が経っていて、ミレールのこの姿はもう長くは保たない。今が何時かはわからないが長居は無用だ。

「あらたには関係ありませんわ。それにわたくし、一人になりたいの。どうぞお構いなく……く——うッ！」

勢い込んで今度こそパッと手を離れたミレールだったが、突然襲ってきた気持ち悪さに口を覆ってしゃがみ込んだ。

「おい、どうした？」

「は……、吐き、そう……」

「はあっ!？」

「ううつ!! もう……、だ、めっ……!」

「おいおい……」

そのままミレールは庭園の花壇の隅で限界を迎えてしまった。

その間ノアは立ち去ることはなく、ミレールの背中をずっと擦^{さす}ってくれていた。

「はぁ……はぁ……、ぎぼぢわる……」

「大丈夫か？」

「くる、し……い……」

この時ミレールは、コルセットを締めすぎたことを後悔していた。

転生してすぐにコルセット反対派となったミレールだが、アルマに舞踏会くらいはしていかなければ駄目だと諭^{さと}され、仕方なく締めてきたのだった。

吐き気が少しだけ引いたミレールは、先ほどもらったノアのハンカチで口元を拭う。

胃の中のものをほとんど出したミレールだが、酔いのせいで再びグラグラし始めた頭を抱え、しゃがんだまま動けずにいた。

「つたく。しょうがないな……」

「え？」

「ほら」

「——ッ!!」

急に体が浮いたと思うと、目の前にノアの凛々^{りり}しい顔が迫る。

「あっ……!」

「部屋まで運んでやる」

「で、ですが……!」

「しっかり掴まっつろ」

初めてお姫様抱っこをされて動揺するが、気分がまだ晴れず、抗議や抵抗する元気もない。

また世界が揺れ始め、気分が悪く物事の分別すらつかなくなっていた。

(ダメなのに……頭が……グルグル、まわりますわ……、ですが、ノアから離れないと……)

まだ酔いの覚めないミレールは、そのままノアに大人しく運ばれた。

王宮には休憩室と呼ばれる部屋がいくつもある。これは単に休憩するためだけではなく、男女が睦^{もつ}み合う目的でも使われた。

これも小説の設定なのか、主人公のレイリンは対象の男性たちとたびたびここを利用していた。

もちろんレイリンから誘ってではなく、強引に迫る男性に連れ込まれてだが。

ノアはミレールを抱えたままベッドに近づくと、顔色の悪いミレールをベッドに下ろし、うつ伏せにさせた。

横になれたことで少し楽になったが、まだ気分が悪く、頭もクラクラして目が回る。

(もう……最悪、ですわ……。どうしてこんなことに……)

ミレールはまた泣きたい気分になってきた。酔っ払ってノアに絡んだ末に、介抱までさせてしまっただなんて、と。

打ちひしがれた気持ちでうつ伏せのまま寝ていると、不意にミレールの体が楽になった。

「はあっ……」

そのおかげで体を締め付けていた圧迫感がなくなり、深呼吸をした。

ノアがドレスの背を解き、コルセットの紐をナイフですべて断ち切り、締め付けていたものを取り外したからだ。

「大丈夫か？ これでだいぶ楽だろ？」

「え、ええ……。申し訳、ありません……」

締め付けがなくなると、ようやくミレールの気分の悪さが緩和された。まだ頭はクラクラしているが、体が楽になっただけでだいぶ違う。

「ほら、水。飲むとスツキリするぞ」

「……はい」

素直に返事をして、ミレールは体をゆつくりと起こす。

受け取ったコップを両手で持ち、コクコクと喉を潤す。レモンが中に入っていて、気持ち悪かったミレールはさっぱりとした気分になった。

「はあ……。ありがとうございます」

飲み終えたミレールが顔を上げると、ベッドの脇で立っていたノアが顔を赤くして横に逸らした。

「あの？ 何か？」

口元を押さえたノアにミレールは不思議そうに声をかける。

「ドレスっ……！」

「はい？」

「は、はだけてるぞっ！」

「——あ……」

言われて下を見るとたしかに、ドレスがずれ落ち、胸元がかなり露出している。

かるうじて見えない程度に引つかかっているが、今にもミレールの丰满な乳房が見えそうだった。どうりで肌が涼しいと思っていた。コルセットの紐を切ったのなら当たり前かと、ミレールは酔っていて回らない頭で冷静に判断した。

そして着ていたドレスをゆつくりと脱ぎ出した。

ミレールの丰满な乳房や、磨き上げられた白い肌、括れた腰回りが、すべて露わになる。

「なっ!? お、おいっ！ ま、待てっ！」

「見苦しいものを見せてしまい、申し訳ありませんわ……ドレスが汚れてしまったので、脱いだままです」

慌てるノアをよそに、ミレールはふっ、と自嘲した。

恥じらいもなく、外気に晒された素肌が心地好いとさえ感じる。着けていた仮面も邪魔だったので外して床に投げてしまった。

「何も、全部脱がなくてもいいだろ!？」

ノアが慌てたように顔を逸らしながら焦っている様子を見て、転生前の記憶が脳裏をよぎる。

夫のように彼が自分の裸を見たくなくて逸らしているように思え、惨めな気持ちになった。

「別に……わたくしの肌など見ても、誰も劣情など抱きませんわ……」

まだセックスレスを解消するために頑張っていた頃、裸で布団に入り、ものすごく勇気を振り絞って杏から夜の営みを誘ったことがあった。

だが、夫から言われた言葉は、「疲れてるし、そんな気分になれない」という、冷たいものだった。

ノアはミレールを非常に嫌っているし欲情することなどない、と回らない頭で思う。

さらに長い間夫から女として見られなかったことも加わり、ミレールはその方面に対して投げやりになっていた。

生まれたままの姿になったミレールは、フラフラとベッドから起き上がる。

「お、おい！ そんな格好で、どこへ行くんだっ!？」

腰まで伸びた髪のおかげで多少は隠れていたが、ミレールの艶めかしい肢体は灯りに照らされ、豊満な乳房も括れた腰も全てが露わになっている。

「どこ？ さあ……」

ノアは変わらずベッドの側で立ったまま、ミレールから顔を背けている。

酔っているミレールは、やはりノアは自分のことなど見たくないのだ、と悲しくなった。

その姿が前の夫と重なり、すべてがどうでもよくなったミレールは、その格好のまま外に出ようとした。

「さあ……つて、おい！ 待てつて！」

ノアの脇を通りすぎると、慌てたノアがミレールの肩を引き、ふらついた体が倒れた。

すると背後から抱き留められたが、とっさに後ろから回った彼の手がミレールの乳房を掴んだ。

「……あつ」

掴まれた乳房にグツと力が入る。

「——ッ！ くそッ……!」

苛立つように放たれた言葉と共に、背後から遠慮なく両手で豊満な乳房を揉みしだかれる。

「あつ！ あんッ！」

久しぶりに感じる快楽に、ミレールは思わず甲高い声を上げた。

ミレールの肩口に顔を埋め、ノアは興奮したように息を乱し、耳朶に舌を這わしている。

「ん！ ああッ！」

「そうやって、俺を挑発しているのか？」

ぬるりとした感触に体を震わせている間に、ツンと立ち上がった薔薇色の突起をきゅつと指先で摘まれる。

「んあッ！ あ、ああっ！ だ、めえ」

「だめじゃない。こんなに硬く尖らせて……いいんだろ？」

ミレールの耳元で聞こえる切羽詰まった声と、ノアの荒い呼吸。

彼の情欲を含んだ声に、ミレールの劣情が刺激されていく。

「ん、んんッ！ いいっ……気持ち、イイッ！」
「そうだ。もっと素直になれよ」

「あうッ！」

ノアは愛撫^{あいぶ}していた舌を耳朶^{じだ}から首筋に降ろし、そのままミレールの柔らかな首根を軽く噛みながら、指先で尖^{とが}った乳房の先端を弾いた。

久々に触れられる肌の感覚が刺激的すぎて、ミレールは過剰なまでに反応した。

「やあッ！ あっ、あっ、あッ!!」

体をくねらせ悶^{もた}えるミレールを、ノアは容赦なく追いこんでいく。

(本当、に……ダメなのに……、気持ちよすぎて、止められない！)

転生する前もあわせて、ミレールは夫以外の男性経験がなかった。

それに加え、妊娠がわかってから六年もの間セックスストレスが続き、こんなふうに触れられることも、自分の体を他人に弄^{いじ}られることもかなり久しぶりだった。

乳房の先端を指先で弄^{いじ}られていると、ミレールは布越しにノアの硬いモノが臀部^{でんぶ}に当たるのに気づいた。

擦り付けられる熱い塊^{かたまり}に、ミレールの気持ちがさらに昂^{たか}まっていく。

「はあッ！ ん、んんッ!!」

ノアに背中を舐められ、ビクッと体が震えた。

仰^のけ反^そった体に追い打ちをかけるように、突き出した乳房の先端を強く摘^{つま}まれるとビリビリと鋭

い快楽が全身に走る。

「んんッ!!」

体がビクッと大きく震え、ミレールの秘部から愛液が次々と滴^{した}っていく。

これ以上は耐えきれないとばかりに、ミレールはまた体を振^もった。

「もうっ、ら、め……!! あっ、あッ！ すご……いっ！」

色づいた先端を弄^{いじ}られるだけでどうにかなりそうだった。

首筋を舐めていたノアが、ミレールの抵抗に気づいて顔を上げる。

「もう、ぐしよぐしよだな。こんなに濡らして……そんなに、いいか？」

そう言っ、すでに蜜があふれているミレールの秘部へ指を滑らせた。

「——ああッ!!」

割れ目を指で上下に動かし、くちゆくちゅと卑猥^{ひわい}な音を立てて陰核と肉襞^{にくひだ}を擦っていく。

「んっ、めえッ！ あッ、アッ……やあッ！ アアッ!!」

久しぶりに他人に触れた秘部は、蕩^{どろ}けそうなほど心地好かった。

このまま体が溶けてしまうのではないかと思うほどの快感に、ミレールは抵抗など考えられなくなる。

節くれ立った長い指で敏感な秘部を弄^{いじ}られ、膨らんだ陰核をヌルヌルした指先で捏^ねねるように回されると体の奥が酷^{うず}く疼き、ミレールは内股を擦り合わせながら快楽に悶^{もた}えた。

「はあッ！ や、だあ！ おかしくっ、なるッ!!」

体が感じたことがないほど熱い。

子宮が愛撫の悦びに震え、内に溜まる熱を放出したくて堪らなくなる。

「もっと、おかしくなればいいだろ……」

背後から聞こえるノアの声が、さらに低く掠れて焦燥すら感じた。

秘部から愛液が次々と流れ、部屋中にミレールの甲高い声が響く。

背後からはノアの乱れた息遣いが聞こえている。

「くるっ、来ちゃ、うっ……!!」

強い快楽の波がミレールを襲う。自分でもどうしていいのかわからず、悲鳴に近い声を上げた。

「イキそうか？」

「あ、うっ！ わかつ、ないッ！」

最後を促すようにノアはミレールの脇から顔を出し、尖った乳房の先端を口に含んだ。

全身に力が入り目の前がチカチカして、感じたことのない高みへと追い詰められていく。杏だつた頃でも絶頂の経験はないが、この体中が熱くて切羽詰まった感じがイクという感覚なら、おそらく間違いないのだろう。

「やッ!! アッ! ああッ!! だめっ、それ……、ダメえッ!!」

温かな舌先で転がすように舐められ、指先で敏感な陰核をぐりぐりと擦られ、ミレールは甘く強すぎる刺激にビクビクツと体を大きく震わせ、絶頂を極めた。

「はあッ、はあッ……!! あッ……んあッ！」

達してもなお小刻みな震えが止まらず、ミレールは涙を流しながら弛緩した体をノアに預ける。

ミレールの体を抱き上げたノアはゆっくりと歩き出した。ミレールは力を抜いて甘い余韻に体を委ねている。

するとノアはミレールをベッドへ下ろし、自らの着ていた衣類を脱ぎはじめた。

（何……が、起き、ましたの？）

度重なる出来事に、ミレールの思考はすでに許容範囲を超えていた。

気怠い体をベッドに沈め、うっすらと開けた瞼の隙間からノアの逞しい肉体が露わになっていくのが見える。

普段の騎士服から想像もできないくらい、ノアの身体はしなやかな筋肉で覆われていた。

「あっ……、すご、い……」

ミレールの口から思わず感嘆の声が漏れた。

美術品の彫刻でも見ているような完成された肉体に、ミレールの視線が釘付けになる。

見ただけで魅了され、思わず手を伸ばしたくなるほど美しい肉体だった。

（でも……どうして、ノアは服を脱いでますの？）

まだ呼吸が整わずぼんやりとした思考の中、ミレールの頭にそんな疑問が浮かんだ。

しかし酔いや先ほどの前戯のせいで思考がまともにできず、ただ、目の前の均整のとれた美しい体に視線を奪われ、惚れ惚れとしながらそれに触りたい欲求に駆られた。

——嫌われていると諦めていた。

一目見た時から、ずっとずっと触れたいと思っていた。

夫を忘れたわけではない。だからといって未練など一つも残っていない。

あるのは、虚しさ、怒りと、心に負った傷だけだった。

ギシッと音を立ててベッドに乗り上げてきたノアに、そっと手を伸ばす。

伸ばした手は拒絶されずに握られ、チュッと指先に柔らかな唇が触れる。

それだけでミレールは泣きたくなかった。そしてそう思う前にすでに涙があふれていた。

「泣くなよ。俺じゃ、不満か？」

嗚咽が漏れ、首を横に振るのが精一杯だった。

不満など思うわけがないのだ。むしろこうなることを望んでいたのだから。

「今だけでいい。俺をその男だと思って抱かれろよ。そしたらあんたも諦めがつくだろう？」

横たわっていたミレールに被さるように、ノアが圧しかかってくる。

初めて感じるノアの重みと、久しぶりに触れ合う素肌の感触があまりに心地好くて、胸の奥がきゅつと締め付けられた。

覗き込まれたノアの端整な顔が近づき、ミレールの泣き腫らした目元に彼の唇が優しく触れる。

「……っ」

そんな風にされると諦められなくなる。

ふっと笑ったノアの顔にミレールはどうしようもないくらいときめき、たまらずに背中に腕を回した。

「——好きです。好き、なんですっ……」

おそらくノアは自分に告白してるとは受け取らないのだろう。

以前の自分より、さらに年下の男性。こうしてすぐ近くで想いを吐き出したところで、拾ってもらえるわけじゃない。

でもだからこそ言える。

ミレールは一心不乱に、ノアへの想いを言葉にした。

「わかっています。私なんて、誰からも相手にされないって！ 私のことは好きでも嫌いでも構いません。ただ一度でいいから……私を抱いてくださいっ」

杏がずっと心に秘めていた想いが次々と言葉に変わり、ポロポロと流れる涙がベッドのシーツに吸い込まれる。

「——ッ！ はあ……まいった。これはヤバいな……」

独り言のようにそう呟いたノアは深い瑠璃色の瞳に欲情を色濃く映し、ミレールの濡れた蜜口にそっと指を挿れて膣内を解しはじめた。

「やあッ！ ……はうッ！ あ、ああ……ん！」

ノアは涙で濡れたミレールの目元に再びキスを落とし、まだ硬い膣内を根気強く指で愛撫する。

「あんたって、可愛すぎだろ！ その男に、嫉妬しそうだっ……！」

「ひっ！ つ、や……うっ！」

嫉妬心丸だしのノアの言葉は、膣内を弄られているミレールには届かない。

なんとか指一本入ったが、ミレールは圧迫感を覚えていた。

（指だけでも……苦しいのに。まさかもう一度、あの痛みを経験することになるなんて……）
以前も初めての行為はとても痛かった。だからか、どうしても怖さが先走る。

すると、ノアは体を離れたかと思うとミレールの膝裏を持ち上げ、顔をゆつくりと秘部に近づけた。

「——やッ!!」

広げられた足と共に秘められた蜜口が露わになる。

羞恥と混乱のあまり慌ててノアの頭を押すが、ミレールの抵抗は空しく秘部を舌が這う。

「はうっ！ んあっ……ア……ああ!!」

膨れた陰核を優しく舌先でチロチロと擦られ、さらに蜜口から肉褰ごと丁寧な舌で舐められていく。

（うそですわっ！ ノアが、こんなことっ！）

ノアが与える甘美な刺激に、ミレールは背を仰け反らせながら溺れる。

秘部が蕩けそうなくらい心地好い。やめさせなければと思うのに、体は心を裏切り、もっともっとと食欲に快楽を貪ろうとしていた。

「すげえ……濡れてる。悦さそうだな？」

「う、んっ！ いいっ！ ……すぐ、い!!」

顔を上げたノアはミレールの悶える様子を見て、その顔に笑みを刻んでいた。そして膣内を擦っ

ていた指を二本に増やし、とろとろに蕩けるまで解していく。

「あっ、あッ!!」

節くれ立った指が繊細に動き、ミレールの身体を労るように優しく、時に激しく触れてくる。

「はあッ……んッ！」

「そろそろ、いいか？ 俺も、限界なんだが……」

指を抜いたノアの表情は切羽詰まっついていて、熱り立った男根がピクピクと脈打っていた。

度重なる愛撫に力なく横たわっていたミレールだったが、初めて見るノアの雄が、まるで凶器のように大きく太く見え、恐怖のあまり身体を起こす。

「そ……そ、んな……お、大きいのは、入りません、わ」

「大丈夫だ。なるべく痛くないように、ゆつくり挿れるから」

「ですがっ……裂けてしまいますわっ！」

「いっばい解したし、ココも柔らかくなってるから裂けたりしない」

「で、でも……わたくし、初めてで……」

「ああ。だろうな」

「ですからっ！ その……」

なんとか逃れようと懸命に言い訳を探すミレールだったが、努力も虚しく再びベッドへ押し倒された。
足を左右に開かれ、濡れて愛液の滴る蜜口へ太い男根の先をグッと埋められる。

「ここまできて、引けるわけないだろ。安心しろ……ちゃんと責任は取ってやるから」
「え……？ 責、任？」

思考はそこで途切れ、ググツと膣内へ侵入するものすごい異物感が、ミレールの全ての感覚を支配した。

「——やあッ!!」

下腹部にかかる苦しさや圧迫感と痛みが同時に襲ってくる。

「まっ、て！ い、痛いっ……！」

そう言っているのに、肝心のノアは眉根を寄せ何かに耐えるような苦しそうな表情を浮かべて、どんどん腰を進めている。

「ッ、わ、るい……止まら、ないっ……！」

「んっ……う、ふっ！ やっ、……いッ、たい！」

ミレールは被さるように腰を動かすノアの体にしがみついた。

痛みと異物感に息を殺して耐えていると、ふいにノアの動きが止まった。

「ふう……全部、挿入^{はい}ったぞ……」

「あっ……あ、ほん、と、に……？」

「ああ。……わかる、だろ？」

耳元でそう囁くノアは緩やかに腰を動かし、奥まで繋がったミレールの身体をぎゅうつと抱きしめる。

「んっ！」

「はあ……ナカ、やば、いな……悦、すぎだっ」

汗ばんだ熱い素肌と、力強く抱きしめてくる逞^{たくま}しい腕。

そしていつも威嚇^{いか}するように話す声は色を含み、素直にミレールに欲望を伝えていた。

ミレールは久しぶりに好きな人と結ばれた喜びに感極まり、堰^{せき}を切ったようにまた涙があふれた。

「ふっ……う！」

「悪い、痛むか？」

痛いからだど勘違いしたのか、ノアはミレールを心配そうに見やる。

ミレールはふると首を横に振り微笑んだ。

「違い、ますわ。……嬉しくてっ」

「っ！ あんま、可愛いことばかり言っていると、ひどく、しそう、だっ」

「ひど、く？」

潤んだ瞳でノアを見ていると、ノアはまたため息をつき、止めていた腰をゆっくり動かしした。

「——んッ！ んあッ！」

わずかな痛みとともに、じわりと擦れる膣内がそれとは違う感覚を覚えている。

「く、う、ダメだ……！ キッツ……！」

切羽詰^{せっぱ}まるように眉を顰め、ミレールの身体を抱きしめながら苦悶の表情を浮かべる彼の姿は、ミレールの胸を締め付ける。

「もつと、動、いても、平気、か？」
「うご、く？」

「ああ。あんたの、ナカ……最高に気持ちいいッ」
「ッ！」

汗を滲ませ辛そうに見下ろすノアの凛々しい顔が一際艶めいて映り、自分の身体で感じているのだと思うと、ミレールの気持ちさがさらに高揚していく。

「わたくしも、もつと……貴方を、感じたい、です」

「——ッ！ はっ……はは、初めてのくせに、言ってくれるな」

止めていた腰を性急に動かされ、ミレールはノアに揺さぶられるまま声をあげた。

「きゃあ！ あっ、アッ！ ……んっ、んッ！ んッ!!」

室内にミレールの喘ぎがこだまする。どちらともつかない荒い呼吸音が響き、グチュグチュと蜜口を出入りする男根が淫らな音を響かせる。

「あ、うッ、んッ、ああッ!!」

痛みが際立っていた膣内がノアに擦られるたびに、違う感覚にすり替わっていく。

子宮が疼くようなじわじわした快楽がもつと欲しくなり、ミレールはノアの身体に縋り、動きに合わせて膣内を貪欲に締めっていく。

「う、くっ……、俺のほうが、食われそうだっ」

「あん！ あっ、あッ！ アッ!!」

ノアが呻くように囁き、ミレールの耳朶に舌を這わせる。

「んんっ！」

耳を舐められると背中がゾクゾクと震える。舌が耳を擦るように動くとともに官能が刺激され、ミレールは耐えきれずに出入りしている男根をさらにきゅうつと締めつけた。

「クッ！ す、げえ……!!」

「やあッ！ ふ、あっ……、だ、めっ！」

ノアは限界が近づいているのか、腰の動きを速め、ミレールの膣内を抉るように攻める。

「も、う……持ちそうに、ない！」

上下に身体を揺さぶるノアは汗を流しながら、追い込みをかけているようだった。

「ノアっ！ んッ……す、き……好きっ!!」

「ああ、く、そっ!! ダメ、だ……!!」

ベッドの軋む音と、二人の荒い呼吸とミレールの喘ぎ声、そして混じり合う局部の水音。部屋にはそれしか響いていなかった。

「あっ、あッ、アッ!!」

「っ、イク、ぞっ……!!」

一層膣内を穿つ動きが速くなり、ノアは白濁を放った。

「もっ……!! あ、あッ！ —— んんッ！」

挿入で味わう初めての絶頂と好きな相手と繋がれた悦びで、ミレールはノアにしがみつきながら

身体を激しく痙攣させる。

ノアも体を震わせ、ミレールの腔内に熱い飛沫しづきを注いだのだった。



翌朝。

ガンガンと響く頭の痛みで、ミレールは目を覚ました。

頭痛に加え、体の痛みと気持ち悪さから、二日酔いだと気づく。ここまで酷く二日酔いの症状が表れるのは久しぶりだと、頭の片隅で思った。

ふと隣を見ると、穏やかな寝息を立てているノアの寝顔が目に入る。

「——え？ ノ、ア……?? なぜ、ここに!？」

しばらく硬直したまま、ミレールはノアの寝顔を呆然と見ていた。

訳がわからず思考を巡らせて、そういえばと思い出し、ミレールは慌てて体を起こした。

「痛ッ……!」

腰と局部に鈍い痛みが走った。

そして秘部からは注がれた残滓ざんしがドロツと流れ出てくる。

「なっ？ や、な、に……?」

受け入れ難い現実を思い出し、思わず心の声が漏れてしまった。

（え……? えッ!? ええええッー!! う、嘘ですわアアッ!?）

二日酔いが吹き飛ぶほど驚き、ミレールは起き上がったまま頭を抱えた。

あれだけ酩酊めいていしていたのに、憎らしいほど記憶は鮮明だった。自分で服を脱ぎ、好きだと言いながら思い切りノアに甘えて、最後まできっちり抱いてもらった。

しかもそのあとも、長年の欲求不満と酒による酔いの勢いもあってか、二度三度と求められるまま抱かれてしまった。

（やって、しまいました……）

冷や汗がどつと流れ、隣で寝ているノアを恐る恐る見下ろす。

うつ伏せて寝ているノアの寝顔は無防備で、こんな状況なのだが、きゅんとときめいた。

艶つややかな黒髪もキリツとした凛々りんりしい顔立ちも目を奪われるくらい整っている。

特に均整のとれたしなやかで美しい身体はミレールの劣情を再び誘い、思わず触れたいくなるほど魅力的だった。

（こんなに素敵な人なのに……なぜレイリンはノアを選ばなかったのかしら？ 王太子殿下も素敵だけれど、彼はノアには敵いませんわ）

自分だったら誰よりもノアを愛して、大切にしていあげるのがいい。

そう思うのだが、何しろノアはミレールをたいそう嫌っている。

父親同士の仲もすこぶる悪い。ミレールの父親はノアの父親を見下している節があり、だから小説のミレールもノアのことを下に見ていた。

幼い頃から長年^{てんが}培^{つちか}われた関係性はどう修正してもやり直せるはずがなく、嫌われることはあっても、これ以上好かれることはないのだ。

しばらくの間、すやすやと眠るノアを、ミレールは切ない気持ちで眺めていた。
(ダメね……そろそろ行かなくては。ノアに見つかったら、彼がショックを受けてしまいますもの)

自分の髪色が金色から栗色に戻ってしまっている。葉が切れている証拠だ。

一夜を過ごした相手がミレールだと知ったら、ノアはショックを受けて激怒するだろう。その姿を想像するだけでミレールの胸がズキズキと痛む。それに、ノアが自分を非難するように詰^なってきたら、それだけでミレールの心は壊れてしまいそうだ。

お互いのためにならないと、ミレールは慌てて昨晚脱ぎ捨てたドレスを捜した。

すぐに見つかったそれは床に無造作に置かれており、ミレールは軋^きむ身体をおしてゆつくりとベッドから立ち上がった。

なんとかドレスを拾い、急いで着る。コルセットは紐がすべて切られていたので諦めた。

背中の留具はとめられないので、悪戦苦闘しながら腕を後ろに伸ばし、限界までなんとか自分で留める。

「——おい」

「ひっ!!」

突然背後からかけられた声に驚き、体が大きく跳ねた。

怖くて振り向くこともできず、ノアに背を向けたまま、ミレールは盛大に冷や汗を流している。

「どこへ行くつもりだ？」

焦りと緊張で固まっているミレールに近づくノアの足音が聞こえてくる。

その足音と共に、ミレールの心臓もバクバクと嫌な音を立てて忙しく動いていた。

「ッ！」

背後から抱き寄せられ、ビクツと体が震える。

「逃がすわけないだろう？」

「う、っ」

まだノアはミレールだと気づいてないのか、裸のまま抱きしめている。

ミレールの体が、動揺と焦りでカタカタと震え出す。

「ん？ あんたの髪、こんな色だったか？」

そこでミレールの変化に気づいたのか、ノアはミレールの体をくるっと向き直らせた。

とっさに顔を背けるが、ミレールの容貌がすべて隠れるわけではない。無駄な抵抗だとわかっていたが、そうせずにはいられなかった。

「なっ!？」

ノアは瑠璃色の目を大きく睜^はっている。

そしてしばらくの沈黙のあと、静かな怒りを湛^たえるように冷然と笑った。

「——へえ？ ということか、説明してもらおうか？」

ミレールは今、人生最大の危機を迎えていた。

ミレールは休憩室にあるテールセットの一人掛けソファに腰掛け、両膝に手を置き俯いている。その顔はすっかり青褪^{あおざ}めていた。

「――で？　これは一体、どういうことだ？」

衣類を身につけたノアは対面で腕を組んで椅子に座り、いつも以上に低い声で話す。そして同時に、責めるようにミレールを睨^{にら}んでいた。

「ど……どう、とは……？」

「あんたがわざわざ変装までして、仮面舞踏会に出席していたのか、ってことを聞いているんだがなあ……」

「っ！」

ミレールの背中を流れる冷や汗がさらに酷くなる。

ノアの声音には明らかに怒気が含まれており、にもかかわらず責められないことがむしろミレールは辛かった。

俯いているのに、ミレールはノアの視線を痛いほど感じていた。

（やはり、昨日と全然違いますわ。ノアはミレールのことを本当に嫌っていますもの……。これまでのことを考えれば仕方がないのだけれど、わたくしもこれまでのわたくしとは違いますから、この対応は辛いですわ）

泣きたくなる気持ちをぐっと抑え、ミレールは短く息を吐き、覚悟を決めて顔を上げた。

「ちよっとした余興でしたの。仮面舞踏会なのですから、少しは普段の自分と変わらなくてはつまらないでしょ？」

平気そうな口調で話したが、語尾がわずかに震えた。

ノアはミレールの言葉の意味を考えるようにしばらく黙し、話し始めた。

「……確かに。昨日のあんたは全くの別人だった」

凛々^{りんり}しい顔にある整った眉を不機嫌そうに寄せ、ノアは腕を組む。

ミレールは俯いたまま膝のスカートを握り締めた。

「だが、俺はあんたを抱いた。責任も取ると言った。その言葉に、偽りはない」

続けて話したノアの言葉にミレールは衝撃を受けた。

呆然として目を大きく見開き、考える前に言葉が先に出ていた。

「――いりませんわっ!!」

「はっ……？」

ものすごい剣幕で立ち上がったミレールは、対面のノアに向かって叫んだ。

「貴方^{あなた}は相変わらず阿呆^{あほう}ですわね！　そんなもの、黙^{もく}っていれば誰にもわかりませんわ！　バカ正直に責任を取るなど……今後の人生を棒に振ってもよろしいのっ!？」

呼吸を荒らげ、捲^{まぐ}し立てるようにミレールは話す。自分でも驚くほどスラスラと、言葉が口をついて出てきた。

その様子にノアは呆氣にとられていたが、しばらくして話し始めた。

「言っとくが、あんたはもう王太子妃候補にはなれない。あれだけ殿下に固執し、俺を嫌っていたあんたがそんなことを言うとはな」

「それはもう……、諦めていますもの」

「だが、あんたは純潔を失った」

「だからなんだと言うの？ そんなものなくても、生きていけますわ！」

わざと強気に言い放ったミレールに、ノアは驚愕の表情を浮かべた。

「は？ いや……だから、嫁ぐ時に——」

「ハッ！ それこそ余計なお世話ですわ！ 貴方には関係ないことではなくって？」

「関係なくはないだろ。俺があんたの……」

「ですから、何度も申し上げていますわ！ わたくしは気にしていませんし、貴方に責任も求めておりません！ これ以上の話し合いは無意味ですわ！」

はあっ、とさらに短く息を吐いたミレールは、不機嫌さを装いながらそう言い放ちノアから顔を背けた。

「しかし……未婚の男女が婚前交渉をした場合、必ず責任を取らなければならない」

驚きながらもミレールの話を聞いていたノアは、そう呟く。振り向いたミレールは、端正な顔を歪めて話すノアを見て、ズキリと胸の痛みを覚えた。

「貴方のその耳は飾りですよ!? お互い黙っていれば誰にもわかりませんわ！ ……それに、貴方

はわたくしを嫌っているでしょ？ そんな男性のもとに嫁いでも、不幸になるだけですもの……お互いのためになりません」

ノアのことは好きだが、無理やり自分に縛りつけたわけではない。それに昨日の彼の行動から察するに、ノアは少なからずレイリンに好意を寄せているのだろう。

しかし性格上、彼はこう言わざるを得ないのだ。誠実で責任感が強いノアは曲がったことをとて嫌う。

だがミレールは、そんな義務を理由に、強引に婚姻を結びたくなかった。

「いいこと!? 昨日は何もなかった！ 貴方はわたくしに会っていない。触れてもいない！ ……おわかり？」

ミレールの放った言葉を聞きながら、ノアは立ち上がったまま呆然とミレールを見る。

「とりあえず、わたくしは帰りますわ。御者を待たせたままですもの」

「いや、おいっ……!」

彼は引き止めるように手を伸ばしたが、ミレールは構わず扉に向かって歩いた。

「それでは、ごきげんよう」

扉のすぐ前で振り返り、ノアに向かってにこりと笑うと、ミレールは部屋をあとにした。



王宮の馬車乗り場に向かい侯爵家の馬車を探すと、御者は車内で寝ていた。
ミレールのノックの音に気づき、御者は飛び起きる。

「ひえっ！ あっ……お、お嬢様!! ご、ご無事でしたか!？」

「ええ。言っただいしょ？ 朝まで帰らないと思うと」

「ですが……お嬢様にもしものことがあったら、私が旦那様にお叱りを受けますので!」

御者もミレールの父が怖いのか、馬車から降りると涙目でミレールを見つめた。

「お父様にはわたくしからきちんと説明いたしますわ。……ひとまず馬車を出してちょうだい。疲れているの」

「これは、失礼をつ！ すぐに出発いたします!!」

ミレールは馬車に乗り込むと、ふかふかの背もたれに体を預けて一息ついた。

（はあ……これからどうしましょう。ノアとあんなことになってしまつて、これでは原作からだいぶ外れてしまいますわ……）

疲れた体を休ませながら、ブーツと窓の景色を見て昨夜の出来事を思い返す。

ノアは相手がミレールだと気づかなかつたから、口調も柔らかく笑顔も見せてくれた。

体に触れてくる骨張つた手は見た目に反してとても繊細で丁寧に動き、ミレールを見つめる瞳も優しさであふれていた。

騎士団で鍛えているだろう身体には綺麗に筋肉がつき、手足も長くてスタイルもとても良くて、あの身体に抱かれたのかと思うとそれだけで幸せな心地になった。

（それにしても……昨日のノアは本当にすごかつたですわ。腕つぶしも強いけれど、アッチのほうもとても強くて……）

そこまで考えて、恥ずかしさのあまり頬を赤らめ、バツと体を起こす。

「イタっ……!」

昨日酷使した秘所と腰がズキツと痛む。ミレールは腰を擦り、再び背もたれに背中を預けた。

（あんなこと、もうこれつきりですわ……おそらく今回でさらにノアに嫌われてしまいましたし、これ以上見ていることもできなくなつてしまいました。ですが、これで良かったのかもしれませんが、どのみちノアはわたくしに、興味などないのですから……）

馬車に揺られながらエボルガー侯爵邸に着くまでの間、ミレールは抱いてもらえた喜びと決して振り向いてももらえない哀しみの狭間で揺れていた。

「ミレール！ こんな時間に帰宅するとはっ！ 一体何があつたのだ!？」

侯爵邸に着いてすぐ、待ち構えていた父親——ギルバートにもすごい剣幕で問いただされる。

「そ、そのドレスはどうしたのだっ!? 背中が裂けているではないかっ!？」

兄が二人いるミレールは、末っ子で紅一点。

しかも、いい年のギルバートが毎日のように愛を囁き四六時中ベタベタしている母親と瓜二つ。そんな彼女を彼は目に入れても痛くないほど溺愛していた。

ギルバートは四十過ぎだが渋めのイケオジだ。ミレールと同じく栗色の髪に彫りの深い濃い顔立

ち、瞳の色は緑色だが耳の形や眉の辺りはミレールと似ている。

「ただいま帰りましたわ、お父様。遅くなってしまつて申し訳ありません。コルセットがキツくて途中で具合が悪くなつてしまいましたの……ですから王宮の侍女にお願いして、コルセットの紐を切つてもらつただけですわ」

「しかし、そのような格好で……！ 着替えも用意されなかったのか!？」

「いえ、着替えも勧められましたが、気分が悪すぎて動けなかつたので断りましたの。部屋で休んでいたら寝てしまつて、いつの間にか朝になつていたので慌てて帰宅したまでですわ」

にこりと笑うと、ギルバートのテンションはようやく下がったようだった。

「そうか……具合はもういいのか？」

「まだ少し、体が怠くて……お父様には申し訳ありませんが、少し横になつてきてもよろしいかしら？」

「なにい!? まだ具合が悪いのか!? よしっ!!」

「きゃあっ！ お、お父様!？」

ギルバートはミレールを勢いよく抱え上げ、そのままミレールの部屋へ走り出すのだった。

着替えと湯浴みを済ませ、自分の部屋のベッドで横たわつたミレールは、忘れていた現実にこれからどうしようか頭を悩ませていた。

というのも、ミレールは王太子妃候補の一人として挙げられている。

そこにはもちろんヒロインで、伯爵家出身のレイリンも入っている。

これから行われるこの王太子妃候補者選抜は三ヶ月ほどかかるのだが、選抜といっても試験のようにテストを受けるわけではない。ただ王太子妃候補として半年間王宮で暮らすだけだ。

しかし、実際には試験官のような侍女や侍従が至る場所で目を光らせており、陰で採点されているのだ。

もちろん王宮で不祥事など起こそうものなら大幅に減点され、不祥事の種類によってはその場で失格となる。それに広く公表されれば家門の恥となりうる厳しいものだ。

(マズいですわ。非常に、マズいですわっ……!)

すでに王太子妃候補として登録されているミレールは、今さらながら頭を抱えていた。

書類はすでに受理されており、候補を取り消すことはできない。

(これは軌道修正しなければっ！ ひとまず候補者として王宮に通いつつ、レイリンを引き立てるようにサポートすればどうになるかしら？ どうせミレールは王太子妃には選ばれませんが、わたくしはこれから他の候補者がどう行動するかわかっていきます。レイリンの邪魔さえしなければ、最悪の未来は防げるはずですよっ!!)

なんとか身の振り方を見出したミレールは、ベッドからガバツと起き上がった。

「つうっ!」

まだ腰と局部が痛む。しかしその痛みを不快だと思わず、むしろその事実が嬉しかった。なぜならノアと結ばれた痛みだからだ。

立ち読みサンプル はここまで

ミレールの部屋をザッと見渡すと、ドレッサーにテーブルセット、広い天蓋付きベッドに大きなクローゼットと豪華な家具が並ぶ中、一際目を惹くものがある。

それは壁に飾られているマクレインの姿絵だ。以前のミレールがマクレインに相当惚れこんでいた時に購入して、毎日拝むように見ていたもの。

(これも、もう……必要ないわね……)

そう思うのだが、なぜか心の奥底がチクリと痛んだ。

ミレールはベッドに座ったまま蠕^{わだかま}る感情を持て余し、服の胸元をぎゅっと掴んだ。

この感情は以前のミレールの気持ちなのかもしれない。だが、杏がミレールに転生したと同時にマクレインへの恋心は綺麗さっぱり消えてしまった。

(ミレール……ごめんなさい。けれど、どう転んでも貴女が王太子殿下と結ばれる未来は存在しません。貴女のためにも、原作通りにならないようにわたくしがどうかしてみせますわ)

ミレールは純粹にマクレインに好意を寄せていた。昔からマクレインのことが大好きで、マクレインがミレールの人生における全てだった。

杏だつて振られたことくらいあるし、見ているだけで終わった恋もたくさんあった。だからミレールの気持ちは痛いほどわかる。

だけど好きだからといって、誰にでも想いが届くわけではないし、何をしてもいいわけでもないのだ。

これだけの美人にあれだけ好きだと言われても、マクレインが靡^{なみ}くことは一度もなかった。

ミレールは幼い頃からマクレイン一筋で、マクレインのもとに嫁ぐことだけを夢見ていた。そうしてミレールはレイリンを陥れ、自分がマクレインの隣に立とうと目論^{もくろ}んでしまった。相手を想うがゆえの悪事。

もちろん元のミレールが悪い。だが、そう思うと彼女がとても憐れに思えるのだ。

ミレールはまたベッドに横たわり、マクレインの姿絵を見ながら物思いに耽^{ふけ}る。

(貴女も、ままならなかったのね。お互い、想いが通じることはありませんが……せめて潔く原作の舞台から降りられるように、わたくしが貴女の分まで尽力いたしますわ)

昨日の疲れもあり、ミレールはベッドに横たわったまま意識を手放した。

それから何事もなく、数日が平和に過ぎていた。

しかし、事態はなんの前触れもなく一変した。

「ミレールっ!! これは一体どういうことだあっ!!」

自分の部屋でお茶を飲んでたミレールは、ギルバートがドアを蹴破りそうなものすごい勢いで乗りこんできたのを、びっくりしながら見つめた。

「お、お父様!? どうなさいましたの!?!」

「旦那様!?!」

ギルバートは息を切らしたまま目を血走らせ、ミレールにズカズカと迫る。

「オルノスの倅^{せがれ}が、お前に求婚状を送りつけてきたのだっ!!」